平成１７年度　協働のまちづくりフォーラム
「仕掛人（キーパーソン）がまちを創る」

【日時】　　平成１８年3月１２日（日）１３：３０～１７：００

【場所】　　岸和田市立産業会館２階集会室

【内容】

第１部　事例紹介

事例紹介①『“らしさ”を活かしたまちづくり～なら燈花会～」

NPO 法人「なら燈花会」の会前会長　　朝廣　佳子　氏

朝廣　佳子さん　（ＮＰＯ法人なら燈花会の会　前会長、
（株）読売奈良ライフ代表取締役社長兼編集長）

岡山県出身。９３年（株）読売奈良ライフ取締役社長に就任。９９年（社）奈良青年会議所第４０代理事長「カウントダウン 2000 in NARA」実行委員長及び「なら燈花会」実行委員長、２０００年に「なら燈花会の会」会長に就任。０２年（株）読売奈良ライフ代表取締役に就任。

「奈良らしさ」を追求し、「なら燈花会」を成功に導いた仕掛人。お祭り騒ぎ、一過性のイベントではなく「奈良にふさわしい祭りとは、奈良らしい楽しみ方」を追求し、議論を重ねてきた。

「きっかけがあれば、自分の住んでいる地域の良さを見つめなおすことができる」と語る朝廣さんのモットーは、“みんなが主役のまちづくり”、“チャンスは逃さない”、“最後はやる気と根気！”

興福寺での燈花会の様子

春日大社若宮神社

【なら燈花会について】

○　「なら燈花会」は、毎年 8/6 から 8/15 までの 10 日間、奈良公園一帯（浮雲園地、猿沢池、浮見堂、興福寺、東大寺等）に、毎晩ろうそく 1 万数千個を灯し、幽玄の美しさを体感していただく灯りの祭りである。

○　NPO 法人「なら燈花会」の会の会員 150 人が運営に当たり、当日サポーターは 10 日間で約 3000 人集まり、これらの人たちが主に点灯準備から消灯までの作業を手伝ってくれる。年齢層も、5 歳位から 80 歳以上まで幅広い層が参加している。平成 11 年に始まり、毎年来訪者は増え続け、平成 17 年には 70 万人を突破した。

○　周辺寺社では、8 月 14、15 日に伝統行事が行われており、古い行事と新しい行事を併せるのに反対意見も多かったが、5 年目から一緒に開催している。

○　奈良には、古都という歴史と伝統があるから、「なら燈花会」のようなものが成り立つと思うかもしれないが、奈良は古いものであるからこそ、新しいものをなかなか受け入れてはくれなかった。非常に難しかった。

【なら燈花会の始まり】

○　奈良の夏は、「夏枯れ」といって、この時期にはほとんど観光客が来なくなる。それを解消するために、奈良青年会議所や商工会議所青年部等が中心となり、「ならまつり」がスタートした（１９８９年）。

○　「ならまつり」は世界遺産である平城宮跡の朱雀門前を会場に、誰でも参加できる市民の参加ステージを作り、2 日間開催した（当初は朱雀門は未建設）。

○　ただし、毎年実行委員が変わる（持ち回り）上、「奈良の振興につながるものではない」、「本当に奈良らしいのか」ということで、「これでいいのだろうか」という自問自答が続いた。

○　そこで、１０年を節目に考え直し、もう一度「奈良らしさ」というものを、1 年かけて考え直した。
○　「まつり」とは、本来、賑やかで楽しいもので、それに対する憧れがある。しかし、古都は規制がかかり、花火もあげられない。しかも、外の人が奈良に求めるのは、「静けさ、安らぎ、癒し」である。
○　県の観光課の人から、「ろうそくを並べてはどうか」という意見はあった。
○　しかし、若者の奈良離れがあったり、辛気臭いということで反対が多かった。
○　そんな時、若草山でのカウントダウンイベントを行う機会があって、準備段階で市民の方に何度か若草山に登ってもらった。奈良の人でも「若草山に初めて登った」という人が多く、夜景の美しさに感動していた。
○　それを見て、奈良の灯りの美しさ、静けさを祭りにすることは奈良の人にも奈良の良さに気付いてもらえると思い、灯りの祭りに踏み切った。
○　「燈花」は、花のように開くと縁起がいい、「会」は、人がたくさん集まるということである。
○　毎日数千の灯りを並べるために、ろうそくをどんな器に入れ、どう並べるかを検討した。
○　ならまつりの反省から、団体でやっていたのではいずれ義務感が出て、いい祭りにはならない。
○　「この祭りが好き」という市民にやってもらおうということになった。自主的な独立組織を作ることを１年目から取り組んできた。役員も毎年変わらず、数年は続けようということにした。

朝廣　佳子さん

ＣＯＵＮＴＤＯＷＮ２０００
ｉｎ　ＮＡＲＡ
（遠くの山は若草山）

【なら燈花会期間中の流れ】
○　NPO 法人「なら燈花会」の会の会員は、春から企画と準備に当たり、期間中は、当日サポーターのリーダーになる。当日サポーターは、事前に希望日を登録する。
○　期間中、当日サポーターは 17 時に集合して受付する。
○　会員から説明を受け、カップに水を入れて、並べる。そしてお弁当タイム（お弁当は配布）。１９時前にろうそくを入れる。
○　夏休みということもあり、親子サポーターが多い。子どもたちは喜んで火を点ける。21 時 45 分には消灯して、22 時 20 分頃にはすべて撤収する作業で１日が終わる。これを１０日間繰り返す。
○　その他会員は、警備担当、広報担当、「燈花茶」担当、販促担当等に分かれて仕事を行う。他にも協賛金集めやサポーター集め、ポスター張り、のぼり設置等々も行っている。
○　イベントとしては、障害者のためのプレイベント「早咲きの日」やレセプション（協賛金集めのために、協賛会社の人に来てもらい知ってもらう）、ミニライブなども行っている。
○　6 年目から、ＪＲと近鉄がタイアップ事業に位置付けて下さり、駅張り、中吊りだけでなく、電車のトップ看板に燈花会のマークを付けたり、車内放送、主要駅でのＰＲなどを行っていただいた。そのＰＲの影響で観光客が飛躍的に増加した。

○　また「一客一燈」といって、参加費 500 円で誰でもろうそく点灯に参加することができる。
○　「燈花会」はどこでもできるので、東京や韓国にまで広がっていっている。
○　「なら燈花会」の予算は、全体の予算が 4000 万円で、その収入の内訳は、奈良市と奈良県から合わせて 1600 万円、企業の協賛が 1200 万円、販促グッズ販売などで 1200 万円となっている。
○　奈良市の経済波及効果は、直接効果で 19 億円、間接効果を含めると 28 億円にも上る。
○　「なら燈花会」の成功した秘訣として、
　１　奈良公園のロケーション（静寂と闇と神仏の住まう空気）

・「静けさ」をマイナスと思っていたが、静けさがあったからこそ成功した。

2　本物の火を使っていて、シンプルであること

・ろうそくの灯りは誰が見てもきれい。内容がシンプルであることが大事。

3　参加型観光であること（半数以上が奈良市以外の人）

・遠方から泊りがけで来る。

4　ボランティアの力

5　地域・行政・企業とのパートナーシップ

6　ホスピタリティが基本

・身近に観光客の生の感動の声（「きれい」「すごい」）が聞こえ、達成感が味わえる。

7　単年度性から脱却した

8　陰で支えるメンバーがいた

・見えないキャラクターがあってこそ成功した。

○　これらのいろいろな要因があってこそ成功したといえる。

事例紹介②『“過疎のまち”から“賑わいの山里”へ～足助町の取組み～」

（（株）三州足助公社社長（足助観光協会会長）、元足助町助役）　　小澤　庄一　氏

小澤　庄一さん　（（株）三州足助公社社長（足助観光協会会長）、元足助町助役）

愛知県足助町出身、足助町役場に勤務。企画課長、教育長、助役を経て、99 年に足助町観光協会会長に就任。

足助町は、７０年に過疎地域の指定を受けるほど、高齢者が多いまちだったが、過疎であることを逆手にとって、足助に住むことを誇りに思えるようなまちづくりを住民とともに検討を進めてきた。

「画一的な開発は地域の個性を失ってしまう！」との思いから、足助の伝統的な街並みを保存・継承し、そして昔ながらの工法による「三州足助屋敷」を建設した。

【足助町とは】

○　足助町は、昨年隣の豊田市と合併し、（株）三州足助公社を設立した。

○　足助町は、愛知万博の影響で、アクセスが良くなり、30～40 分のところに高速のインターが 7 つもできた。これでは、地域文化をなくしてしまう、どこもかしこも同じになってしまうという思いがある。

○　豊田市には世界企業であるトヨタ自動車がある。足助町の若者は当然のようにトヨタ自動車に通っている。昔は１．５万人の人口が、今は１万人にまでなってしまった。

【三州足助屋敷の運営】

○　現在、指定管理者制度が話題になっているが、全てを民に任せてしまうというもの。

○　経営のみは、税を使わずに受益者の負担でまかなうという方針の下、施設運営を行ってきた。

香嵐渓の様子
（上：もみじ、下：ライトアップ）

【足助町のまちづくり】

小澤　庄一さん

○　昔、紅葉を植えたバカ町長がいた。しかし、彼にはポリシーがあった。自然の美が最も美しい。それが現在の香嵐渓である。
○　1 日に、マイカーで 30，000 人、観光バス 400 台で 16，000 人の観光客が訪れる。人が集中してしまってアブノーマルだ。
○　しかし、美しいものがあるからこそ、観光（＝人が寄ってくる）なのである。
○　「中馬のおひなさん」は、村の 600 軒のうち 180 軒でおひなさんを外に向けて飾ることになった。2 月 10 日から 3 月 5 日までで、およそ 70，000 人が訪れた。
○　1 人 4，000 円使うとして、2 億 8000 万円にもなる。
○　「福祉センター百年草」も建設したが、ハム・ソーセージ工場（ＺｉＺｉ工房）、パン工場（バーバラはうす）を併設し、高齢者の方が働いている。
○　高齢者福祉を考える時、高齢者に生きがいを持ってもらうことも高齢者福祉の大事な要素であると思う。生涯現役、年金をもらわずに暮らせる人をつくるのが目的である。
○　海外旅行気分を味わって欲しいという思いから、地元のものを活かしたフランス料理をデイサービスの昼食として出している。

三州足助屋敷の様子

中馬のおひなさん

福祉センター百年草

第２部　パネルディスカッション

テーマ「仕掛人（キーパーソン）がまちを創る」

コーディネーター：堀内　秀雄　氏
（和歌山大学生涯学習教育研究センター助教授）

パネリスト　　：朝廣　佳子　氏
小澤　庄一　氏

堀内氏：

堀内　秀雄　先生

○　「地域には宝物が埋まっている。」、「文化的な力を活かして、産業、雇用、文化が両立している。」という話が出たが、一体どこに地域の宝が埋まっていて、市民全体に共有され、まちのエネルギー、運動につながっているのか、なっているのかである。
○　地域資源をどう見るかであり、朝廣さんの観光カリスマのプロフィールの中で、『若草山の関係者になかなか納得してもらえず、「前例がない」と断られたとある。しかし、「前例を覆さないといつまでも変えられない」ということで説得していった』とあった。その想い、背景はどうだったのか。

朝廣氏：

○　千年超えのカウントダウンイベントで、９９年１２月３１日の夜、若草山の上で 1000 人による人文字を行ったのだが、見た目より傾斜がきつく、しかも夜の実施。若草山は冬に閉山しているし、夜も閉まっている。ゆえに管理している県から「前例がない」ということで、それがなかなか許可してもらえなかった。

○　「前例がない」というが、本当にそうなのか調べた。すると、大正時代に 1 件前例があった。

○　そこで、少しずつ前例を作ればいいということで、徐々に人数を増やし登った。

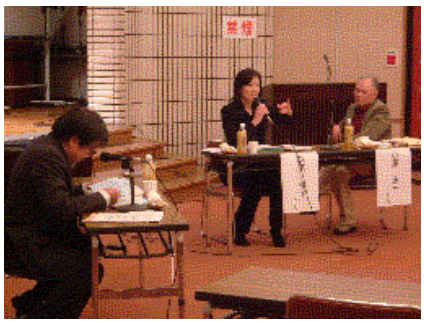
○　また、山焼きのためにススキを植えているのだが、その芽を踏むということで自然破壊だと攻撃された。

○　そこで、その攻撃した先生を連れて登った。結局、先生の方が根負けして「賛成しないけど勝手にやれ」ということになった。

○　きっと「法律的に問題ない」ということでやってしまうと、その時は問題なくても、次の新たな問題が発生してしまう。根気よく誠意を持って問題をつぶしていくということが大事だと思う。

堀内氏：

○　女性がリーダーシップを発揮するとまちが変わる例が多いが、「女性だから」というのがあったのか。（女性として抵抗なかったか、女性だからこそできた？）



朝廣氏：

○　「女性だから」というのは意識したことがないが、男性の仲間と話をすると、「僕たちじゃ、雨降ったらパーになることはしない」とよく言われる。あまり何も考えないというか、無鉄砲というか「何とかなる、何とかなる」ということで前に進んでいる。

堀内氏：

○　小澤氏の観光カリスマのプロフィールの中で、三州足助屋敷の建設の件で、建設費や維持費の予算をめぐり町議会とのやりとりで、小澤氏は「３年以内には独立採算にのせて町の予算はビター文使わない。それができなかったら、俺が足助屋敷を燃やしてしまう。」と言ったということだったが。

小澤氏：

○　出任せに言っちゃったんだ。でもロマンを持つことが大事である。

○　先程の話につながるが、男は結構計画力があって、慎重にやる。このことと、このことを押えておけば、あとは何とかなる。

○　文化や地域について勉強して、文化事業として、まちに財産を残す。税を使うのだが、赤字になるようであれば辞める。

会場の様子

～地域資源の目の付け所はどこにあるんだろうか～

堀内氏：

○　地域資源の目の付け方、奈良のまちづくりをどういう風に見ているか。地域資源をどう発見したのか。

○　また 10 年続いた「ならまつり」をやめることに抵抗はなかったのか。

朝廣氏：

○　１０年間してきた「ならまつり」がマイナスでやめたのではなく、「ならまつり」のノウハウがあったからこそ「なら燈花会」がある。やはり全然違うものをやることはダメということに気付いた。
○　また視点を変えてみる（離れた人が見てみる）ことが大事である。
○　一気にこの数のろうそくの火を灯したから良かったのでは。
○　いろいろな業種（印刷、建築会社、電気屋等）の人たちが集まっていたので、それらの人のつながりを、使えるものはすべて使って行うことができた。それぞれの人のつながりがあったからこそ、できたんだなあと本当に思う。

堀内氏：

○　地域資源の目の付け所はどこにあるんだろうか。
○　合併により足助の良さが消えてしまう心配はなかったか。

小澤氏：

○　国のいうことを聞いていてはいけない。足助町は、豊田市と合併したが、そのことで足助の良さがなくなってしまわないかと危惧した。
○　グローバルの視点から、まちづくりに取り組んでくれる人が加わることで、まちの良さを理解してもらえる。合併により広くＰＲしていくことが大事である。足助は、日本の山村風景の原形なのである。
○　足助俳人の句に、「雨の後　　よい月夜かな　　桜かな」
松尾芭蕉の句に、「馬おさえ　　ながむる雪の　　朝かな」
○　せっかく観光をやるなら、歴史に目を向けてやらなければならない。古くて、新しいまちづくり。
○　お金で作れるものは大したことない。お金をかけなくても、古い伝統の中からまちをつくるのである。
○　風と土の間に人はいるのである。土の上でできるものは本物だ。本来あるものの中から、人の心の豊かさや慈しみに結び付けていく。

堀内氏：

○　岸和田の地域資源はどこにあるんだろうか。外の人から見ると、やはりだんじりなんだろうか。

朝廣氏：

○　岸和田だんじり祭りは、奈良から見れば羨ましい。春日大社などの若宮おん祭りのように、静かに粛々と進んでいるのが奈良のまつりである。市民気質がだんじりにつながるのだろうか。それを活かされたら良いのではないかと思う。

堀内氏：

○　（会場からの質問）奈良まつりの中心となった３団体とは。
○　燈花会の広がった経緯は。

朝廣氏：

○　３団体は、青年会議所、商工会議所青年部、青年経営者の会の３団体が中心となり、行った。
○　「燈花会」は、奈良市と姉妹都市である韓国の慶州でも開催されるなど、海外にも広がっていっている。これは、“ 灯を移す ”、“ 友情の証 ” である。
○　「なら燈花会」を大事にしたいという趣旨のもと、商標登録を行った。
○　大切なことは、団体等の枠を取り払うことである。これが大変である。団体間で進めると、どうしてもしがらみがあったり、団体の思惑で進んだりする。だからこそ「ならまつり」は続かなかった。

団体ではなく、個人として参加することが大切だと思う。

小澤氏：

○　だんじり祭りは凄いと思う。足助にも、養子の人をからくり人形の代わりに躍らせる祭りもあるが、これには顔見世の意味もある。

参加者（本町まちづくり関係者）：

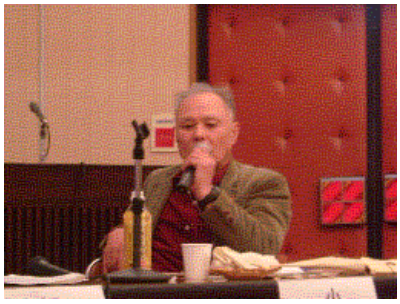
○　町屋の修景を行い、地域資源を活用した住民主体のまちづくりとして活動している。数年前より“夢灯篭街道”を行っている。経済効果等は把握していない。

～住民主体のまちづくりとは～

堀内氏：

○　住民主体のまちづくりを行うにあたって、仕掛人（キーパーソン）が果たす役割とはどういうものだろうか。

小澤氏：



○　役場にいて人をどう繋ぎ、どう活かしていくかである。
○　人は後ろ姿を見て育つ。10 年、15 年続けてやれるような人をつくる。
○　原点を見つめることである。例えば、ある人が雑踏の中を歩いていくとき、いちいちゴミを拾いながら歩いていた。そういうのを見せ、地域の中の人を目覚めさせるのが大事である。
○　また、地域のことを徹底的に勉強することが大事である。30 代、40 代の若い力を徹底的にしごいて、育てていくことだ。
○　今はそんな元気のある人は減ってしまったが、時代を革新していく若い人材は、100 人に 1 人くらいはいるだろう。それがキーマンとなる。
○　さらに、自給自足の農的な暮らしをすることが最も人間的な暮らしであるし、そういう人も増えてきた。

堀内氏：

○　行政や企業とのパートナーシップのプラス・マイナスの効果は。

朝廣氏：

○　以前は、行政は「金を出すが口も出す」という、行政主導の内容によりがちだった。燈花会は行政にまったくの黒子に徹してもらった。
○　行政には、許認可関係や関東方面の広報を主に行ってもらった。またアンケートや人数集計なども協力してもらった。
○　商店街の営業時間の延長等は、行政が一緒に依頼に回ってくれた。行政マンとしてではなく、「なら燈花会」の一員として動いてくれた。
○　企業の協賛金もある程度は増えたが、なかなか渋い。費用対効果をしっかり説明し、燈花会のスポンサーメリットを理解していただく。
○　商店街も最初は協力してくれる店は、ほとんどなく、早くに閉店していた。だが周辺自治会が燈花会を自治会単位でやろうと動いてくれたのをきっかけに少しずつ変わり、今では駅前の商店街も遅くまで開けてくれている。
○　要は、人である。行政も民間も関係なく、まちを愛する人がいれば可能だ。ゆくゆくは、奈良市全

域で、各人が自分の家の前にろうそくを並べるようになれば。

堀内氏：

○　キーパーソンは鼻持ちならぬ者もいるが、どうつくれるのか。

小澤氏：

○　私は仕掛人ではない。ただ、突っ走ってきただけだ。

○　金は出すが、口は出さない存在でいたい。若い人に旅をさせるべきだ。そして、いろんなことを見聞させるべきである。

朝廣氏：

○　私も突っ走ってきただけだ。しかし、そういう人ばかりでは人はついてこない。

○　どういう人とパートナーになるかである。気持ちをわかってくれて、代弁してくれる人、会のみんなの気持ちをフォローしてくれる人、これらの人がいてくれたからこそやっていける。そんなキーパーソンが３人～５人いてくれれば。

○　また、まちが好きでないとまちづくりはできない。自分たちのまちに誇りを持ってくれる人を育てることだ。

堀内氏：

○　市民活動は、頑張る人ほどつぶれてしまう。支えあわないといけないのではないか。

○　足助屋敷には随分お金がかかったと思うが、その決断はどのようにしたのか。

小澤氏：

○　足助町の一般会計が 20 億円というとき、1 回で 3 億円使った。補助金を有効に使った。

○　福祉センター「百年草」には 12～13 億円使った。建設は補助金を使い、経営は受益者負担で行っていく。

会場からの質問：

○　観光客が増えると、ゴミが増え、環境破壊につながらないだろうか。

小澤氏：

○　駐車料金を普段 500 円のところを 1，000 円にすればいい。その分でゴミを処理すればいい。

○　地域は美しくなければいけない。それをわかる人でないといけない。

堀内氏：

○　住民主体のまちづくりの視点、コツを教えて。

朝廣氏：

○住民主体のまちづくりのコツは、

1　地域を知り、地域に誇りを持つ。
　・　価値観の違いをどう有効に繋いでいくかである。

2　中・長期目標を立てて、段階を踏む。

3　プライドを捨てて、互いを尊重する。
　・　団塊の世代は、組織に入ると摩擦が多い。肩書きは出さないことだ。プライドは捨てて同じ一員として共にやっていく。

4　市民の中からキーマンを作り出す。
　・　人との付き合いの中から成立する。場の空気を読み、キーマンがフォローしていく。
　・　みんな立場は一緒だから、面倒くさがらずに、少人数で話し合ったりする。年齢は関係ない。

パワーのある人を前面に押し出していくことだ。目的は一緒なのだから最後には必ず通じるものだ。

5　会議は民主的、透明性のある組織に（意見が言える場づくり）。
6　年齢、性別にこだわらない組織づくりを。
7　自己負担は極力抑える。
8　思いのある人が必ず継続すること。
9　多くの人を巻き込む。

小澤氏：

○　組織は若返るべきだ。若い力を引き出すリーダーがいる。
○　また、女の人を入れる。女の人が元気だと男がついてくる。

堀内氏：

○　まちづくりは人である。しかし、今、まちづくりは苦戦している。自助、共助を支えるようなシステム、それをつくる公助が働いていない。行政の職員も、市民として関わっているが。
○　一人他者ものが来ると「風」になる。まちが変わっていく。小澤さんは助役でありながら、一町民として地域のまちづくりに関わった。市民活動を黒子で支え、支援をしていかないといけない。
○　行政は、今元気がないんじゃないか。また市民活動も縦割りになっているんじゃないか。
○　最後に、ダーウィンの言葉を紹介して終わりたい。

「最も強いものが生き残るのではない。最も賢いものが生き残るのでもない。
最後に生き残るのは、環境をしっかり調べて、知って、考えて、行動して、変えていく種だけが残ったのだ。」

（以上）